

# 「石綿天井」知らずに16年

87.6.17  
毎日

## 川越の教職員住宅 健康障害の恐れ

埼玉県川越市が所有する教職員住宅の天井に、発がん性があり肺障害の原因物質として問題化している石綿（アスベスト）が十六年間にわたり使われていたことが十六日までにわかった。すでにアスベストは撤去されたが、アスベストは吸い込んでから二十〜四十年後に発がんするといわれるため、居住者らは「川越教職員住宅アスベスト被害を考える会」（内田秀人事務局代表）を結成、近く同市と同市教委に対し、健康診断の実

施などを求める要望書を提出する。

教職員住宅（同市藤原町二

七の二）は同市の四十五年度

の事業で、四十六年三月に完

成。鉄筋コンクリート造り三

階建てで、延べ床面積は三〇

六平方メートル。賃貸住宅で、二

階は妻帯者用がそれぞれ三室

ずつ計六室。三階は単身用で

六室。これまで延べ四十七人

が入居した。

アスベストが吹きつけてあ

ったのは一、二階の各室の台

所、六畳間、四畳半、押し入

れの天井部分。テレビなどでアスベストの危険を知った居住者が労働省産業医学総合研究所に分析を依頼したとこ

ろ、発がん性物質のアモサイトとクリンタイルが含まれていることがわかった。

教委は五月一日に撤去作業を終えたあと、室内のアスベスト濃度を測定した結果、労働現場の基準値（二ファイバー・CC中に長さ五ミクロン以上のものが二本）は下回ったものの、住環境としては高濃度の一・二四を測定した。

「静かな時限爆弾（アスベスト災害）」の著書で知られる広瀬弘忠東京女子大教授は「子どもが駆けたりするとアスベスト濃度が高くなるのでアスベスト住宅に永年住んでいたとなると相当危険」と危惧（きん）している。